

『顯昭古今集注』注釈学の形成(下)

注釈の方法

紙 宏 行

前稿では、『顯昭古今集注』注釈の形成過程について考察してみた。^① 同書卷二十奥書、

文治元年十二月十七日、古今一部依梁園教命勘注了。大略釈奥義外歌。先是宰相入道被注献。賜件本加披閱糾邪正。仍多引載彼抄而已。重賜全部差声。

顯昭

という一節から、顯昭注釈は、教長の注釈への批判と六条家歌学の継承という、ふたつの執筆方針を持ち、それがはじめから注釈の性格を規制するものとして注釈の前提にあったことを確認した。さらに、顯昭は寿永二年前後の仁和寺移住を契機に注釈学を進展、深化させていることを本章を引く注釈を例にして論じ、その意味で顯昭歌学は仁和寺という場の産物といえるのではないかと推測してみたのである。

本稿では、顯昭古今集注釈に対しふたつの執筆方針が注釈内容をどのように規制しているかの確認を起点として、その方法と特質を明らかにしてゆきたい。さらに、顯昭注釈の和歌史的な意義にもふれてみたい。

五 『顯昭古今集注』の基本

右に述べたように、顯昭は、教長の古今集注釈を「賜り」[披閱]し「邪正」を「糾」すという方針のもと書き始めた。顯昭注釈における教長注釈に対する態度については、「徹底的に批難している」(片桐洋一氏)^②と捉える評価が支配的である。しかし、それに対し、「むしろ肯定的ですらある」(西村洋子氏)^③という見方もあって、その評価は論者によって必ずしも一定してはいない。「徹底的に批難」という評価については、教長注釈を批判する時の口吻からはもつともなものと思われる。一方、後者の「肯定的」という評価は、ひとつひとつの注釈の教長注釈に対する肯定・否定を検討し計数しての結論であり、意義深く説得力もあるように思われる。

このように、評価が分れているのは、論者の視点や評価基準の相違もあるが、むしろ、教長・顯昭の注釈そのものの視点や方法の違いに基づくのではないか。『顯注密勘』においても、顯昭と定家の注釈態度の相違が指摘されているが、教長と顯昭との相違にも注意しなければならない。そもそも、研究史をふまえての実証的、相対的、禁欲的な性格を共通して持つ現代の注釈を批評するのと同様の基準を、教長・顯昭らの注釈に適用することが不可能なのである。

以上のような評価が、端的にいつて研究史的現状ではある。ここでも改めて出発点に戻って、顯昭が、教長注釈を「披閱」し「邪正」

を「糺」していった、その内実について、次の例から検討してみた。
い。

題不知

読人不知

ヒグラシノナキツルナベニヒハクレヌトミシハヤマノカゲニ
ゾアリケル(二〇四)

ナキツルナベニトイフハ、ナキツルホド、イフナリ。ヒグラシ
トハ、ムシノサ、リ。コレガナクニ、ヒノクレヌトミツレド、
ヤマノカゲナリケリ、トヨメルナリ。

〔教長古今集註〕

題不知

読人不知

ヒグラシノナキツルナベニヒハクレヌトミツレバ山ノカゲニゾ
アリケル(二〇四)

教長卿云、ヒグラシトハ虫ノ名ナリ。顕昭云、ヒグラシハチ
ヒサキ蟬也。弟蝸トカケリ。ユフツカタナクナリ。截虫〔カ
キナセリ〕トモカケリ。ナキツルナベニトハ、教長卿云、ナ
キツルホド、云也。コレガナクニ日ノクレヌトミツレド、山
ノカゲナリケリト読也。

清輔云、ナベニトハカラニト云也。又此歌在猿丸集。詞云、
モノヘイキケルミチニ、ヒグラシノナキケルヲキ、テトアリ。

〔顕昭古今集注〕

教長・顕昭両者の注釈を並べてみた。教長注釈は、冒頭「ナキツ
ルナベニトイフハ」と「ナキツルナベニ」の語釈から始め、続けて
和歌一首の解釈に移り「トヨメルナリ」と解釈のモデルによって
結ぶ（これについては後述）。語釈から始めそれをふまえて一首解
釈に及んでいて、注釈の論述展開の順序としては妥当である。これ
に對し、顕昭は、最初に「教長卿云、ヒグラシトハ虫ノ名ナリ」と

引用して「ヒグラシ」の語釈からかかる。さらに「ナキツルナベニ
トハ、教長卿云、ナキツルホド、云也」とやはり教長注釈を引用し
て「ナキツルナベニ」の語釈を続ける。そして次に「教長卿云ト
読也」と教長の一首解釈を引用する。しかし、引用するだけでこれ
にはふれず、ふたたび「ナベニ」の語釈に戻り、同語釈の清輔の説
を引く。最後は「猿丸集」の引用である。

教長注釈は、語釈を積み上げて一首解釈に至る論述展開で、歌の
一首解釈を目的として、そこに収斂していくような注釈になっている。
これに對し、顕昭の場合は、ほとんど語釈に終始している。語
釈に関心が集中、一首の解釈には関心がなく、このようにである。この
注釈に関する限り、両者の注釈の視点や方法は切り結んでいないよ
うに思える。

しかし、顕昭は、「ナキツルホド、云也。コレガナクニ日ノクレ
ヌトミツレド、山ノカゲナリケリト読也」と教長注釈を引用してい
るのであるから、一首解釈に関心がないのではなからう。教長注釈
は、表層的で逐語訳に近く、その意味では逆に疑問をさしはさむ余
地がないのであつて、一言もふれていないのは、すなわち教長注釈
を肯定しているということなのであろう。「他の誤りを発見すれば
一々あげつらわすにはいられない、顕昭の批判癖」(西村加代子氏、
傍点原)⁴が指摘されているが、顕昭は何か気の付くところがあれば
必ず批判を加えずにはいられないはずだからである。

教長の注釈方法については、私は次のように論じてみたことがある。
すなわち、「トノヤウニ(二ヨセテ)トヨメリ」という単純
なモデルを基本とし、歌にそれをあてはめて作者の心情が歌に表現
されてゆく心的過程(表現方法)を明らかにするといふものである。
それは、当時の一般的な和歌一首解釈の方法でもあつて、清輔や顕

昭も用いていた。教長は、そのモデルをとにかくも『古今集』歌の多く（現存しないが、おそらくすべて）に適用してみせたのである。

「ノヤウニ（ニヨセテ）トヨメリ」という解釈モデルは、歌のことばをそっくり代入して散文化するようにして適用することも可能で、多くの場合、疑問をさしはさむ余地はないような逐語訳的な表層の解釈になる。右の例のように顕昭は何ら言及できない場合が多い。その時には、「邪正」を「糺」すことが十分にできない、自身の学識を披瀝する余地がないのである。顕昭が教長注釈に対し「肯定的ですらある」という評価は、このような注釈をさしての謂いであろう。

顕昭は自身でもこのモデルを適用しているがその例を確認しておく。たとえば、

題不知

読人不知

ホト、ギスナガナクサトノアマタアレバナホウトマレヌオモフモノカラ（一四七）

ナガナクトハ、ナレガナクト云也。万葉ニハ汝トカキテナガトヨメリ。歌ノコ、ロハ、ホト、ギスノアマタノサトニナクヲ、ソネミウラミタルコ、ロニテ、ウトムトハヨメルナリ。良暹歌云、

ヤドチカウシバシナガナケホト、ギスケフノアヤメノネニモクラベム

俊綱朝臣之許ニテ、五月五日詠郭公歌也。懷田嘲哢云、ホト、ト鳴始テ、ギストナガムルニヤト云々。不知古語存長鳴之由歟。万葉歌云、

アシビキノヤマホト、ギス汝鳴バイヘニアルイモツネニオモホユ

という注釈例では、「ナガナクトハ」と語釈を施した後に、それをふまえ、「歌ノコ、ロハ、ホト、ギスノアマタノサトニナクヲ、ソネミウラミタルコ、ロニテ、ウトムトハヨメルナリ」と、一首解釈を提示している。「ホト、ギスノアマタノサトニナク」が「ソネミウラミタルコ、ロ」を意味していることにもふれ、比喩の構造を明らかにするのも忘れない。「ノヤウニ（ニヨセテ）トヨメリ」の解釈モデルは、一首解釈の基本モデルとして通用している。

もちろん、教長の一首解釈に疑義があれば、鋭く批判する。

アツサユミヒキノ、ツヅラスエツヒニワガオモフヒトニコトノシゲ、ム（七〇二）

教長卿云、ツラ、トハカヅラナドライフナルベシ。コレガヤウニ、コトノシゲクテオモフヒトニモエツネニアハズトナリ。

顕昭云、彼卿注スル本ニハ、ツラ、ト書歟。証本ミナツツラナリ。黒葛トカクベシ。カヅラナドライフナルベシト、ウチオモフベキニアラズ。又此歌ノコ、ロハ、ツヅラハ別々ニオヒタレド、スエハヒトツニマキアヒタレバ、ソレガヤウニ、ツヒニオモフヒト、ヒトツニナリテ、イヒカハスコトモシゲカラムト、ネガヘルコ、ロトモキコエタリ。万葉云、

タマノヲノク、リヨセツ、スエツヒニユキハワカレデオナジヲニアラム

此心ナリ。但返歌ニ、コトシゲクトモタエムトオモフナトアルゾ、人ゴトシゲクテアハヌ心歟トキコユル。ツヒニアハズヤアラムトイフコ、ロトモイヒツベシ。

教長注釈は例によって「ノヤウニ（ニヨセテ）トヨメリ」のモデルをあてはめたもので、「オモフヒトニモエツネニアハズトナリ」という解釈である。それに対して顕昭は「彼卿注スル本」と

「証本」との本文異同を指摘し、自らの「証本」の優位性を主張しつつ、一首解釈には「ネガヘルコ、ロトモキコエタリ」とやや遠慮しながらも教長の説を否定している。少しでも疑問を感じるところは、当然のこと批判を加えるのである。

ここで注意すべきは、右にあげた一四七番歌注、七〇二番歌注とも、語釈あるいは本文異同の指摘の後、「歌ノコ、ロハ」という標目を冒頭に置いて一首解釈を提示していることである。顕昭注釈も「歌ノコ、ロ」を明らかにすることを主眼とした注釈であることは明らかである。

顕昭の古今集注釈もまた、「歌ノコ、ロ」を明らかにする一首解釈が顕昭の古今集注釈の主眼であるというのは、『顕昭古今集注』が難義語注釈の集成であるからではなく、『古今集』歌の注釈であるからである。本稿冒頭で確認したように、顕昭の古今集注釈の執筆方針のひとつめは、教長注釈への批判であった。しかし、教長注釈が単純、表層的な一首解釈である限り、批判を加える余地は少なく、「肯定的」にならざるをえない。『古今集』歌の「歌ノコ、ロ」を明らかにする注釈であるという規定に規制された結果といえるのではないか。つまり、教長注釈への批判に徹する限り、顕昭注釈も『古今集』歌の解釈にとどまり、学識を披瀝する余地が乏しくなってしまうのである。ただし、そこに後に述べるような和歌史的意義ももたらしたものである。

六 『顕昭古今集注』の難義語注釈の位相

ただし、顕昭歌学の本領とされている難義語注釈は、古今集注釈においても十分に展開された。

ヤマシロノヨドノワカゴモカリニダニコヌヒトタノムワレゾ
ハカナキ(七五九)

ヤマシロノヨドノトイフハ、イマモハベルミツノミマキナリ。
サレバ、サガミガウタニモ、ミツノミマキノ、マコモグサ、ト
ヨメリ。ソレヲ、カリニダニト、アカラサマナルニヨセテ、コ
ヌヒトラ、マツハカナシ、トヨメルナリ。(『教長古今集註』)
ヤマシロノヨドノワカゴモカリニダニコヌヒトタノムワレゾハ
カナキ(七五九)

教長卿云、ヤマシロノヨドノトハ、イマモハベルミツノミマ
キナリ。サレバ相模ガ歌ニモ、ミツノミマキノマコモグサト
ヨメリ。今案ニ、ヨドガハヨリ北ヲバ淀トイヒ、南ヲバミツ
ト云也。ヨドノワタリノホドハ、河ハ西ヘナガレタルナリ。
ミツノニモ、ヨドノニモ、マコモ、アヤメヲバ、トモニヨメ
リ。河ヲコソヘダテタレドモ、同渡ナレバ、イヅレモトホカ
ラズ。サレドヨドノハ、ミツノミマキナリトアレバ、クハシ
ク申シワケ注申也。

教長の注釈は、これも「ヤマシロノヨドノ」の語釈から始めて「ノヤウニ(ニヨセテ)トヨメリ」とモデルを用いた一首解釈である。しかし、顕昭はこの一首解釈を引用していない。冒頭に引いた奥書に「仍多引載彼抄而已」とあるように、「邪正」を「糺」すべきことがあれば、「彼抄」を「引載」せたくて、批評を加えるはずである。引用もせず言及もしていないことは、疑義はなかったということになる。ここでも注釈の基本部分には付言する余地はなかった。

そこで顕昭は、教長注釈の「ヤマシロノヨドノ」を「ミツノミマキ」と同一視する語釈に対して疑義を発するところから注釈を展開

し、「ヨドガハヨリ北ヲバ淀トイヒ、南ヲバミツト云也」と教長の所説を訂正しようとする。顯昭の考証は生き生きと展開し始める。しかし、それが微細な相違を指摘するにとどまり神経質な印象を与えそうだと思つたのもあろうか、「クハシク申シワケ注申也」と言い訳がましいことばを付け加えて注釈を終えている。「邪正」を「糺」すべき方針で執筆を始めた注釈なのであるから、あえて細かい考証を加えたということであろうか。

言い訳かどうかはともかくとして、「歌ノコ、ロ」を明らかにする一首解釈を基本としているとすれば、「クハシク申シワケ注申也」という銜いを付言せざるをえなかつた語釈（難義語注釈）部分は、附加的派生部分という位置づけにならうか。難義語集成ではなく古今集注釈である以上、一首解釈が基本となることは当然であつて、語釈が附加的な位置になるのもしかるべきである。しかし、附加的であるからといって、意味がうすれるわけではない。顯昭の本領は、むしろその附加的、派生的に展開した、博引旁証と執拗な論理展開の難義語注釈にある。

難義語注釈からさらに展開していった部分には、次のような例もある。

（詞書省略）

業平朝臣

ツキヤアラヌハルヤムカシノハルナラヌワガミヒトツハモトノ
ミニシテ（七四七）

コレハコノトコロニテ、コゾアヒシヒトノコ、ニモナクテ、
コヨヒエアハヌコトヲオモヒテ、月モアラヌ月ニテアルカ、
又春モムカシノハルニハアラヌカ、ワガミヒトツバカリハモ
トノミニテアレド、アヒシヒトモナキハトヨメルナリ。（中
略）顯輔卿語云、顯季卿ノ許ニテ和歌会ノツイデニ、俊頼朝

臣云、業平中将ノ秀歌トオボシキハイヅレゾ。世中ニタエテ
サクラノサカザラバト云歌許歟。此程ノ歌ハコノオハスル
人々ミナ読給ラムモノヲト申侍シカバ、顯季卿驚テ、コハイ
カニカ、ル事ヲバノ給フゾ。ヨモコノ人々ヨマレナムトハオ
ボサジ。我ハ五郎中将ヲオモヒカケマウシ給ヘルガト申ケレ
バ、俊頼ハイカデヨミ侍ラムゾ。コノ人々ハ一定ヨミ給ラム
ト、マメヤカゲニ申ツヨリシカバ、顯季卿ハ別事ナリケリ。
物申サジ。此定ニオボスニテハ、ヨモ此道ニ冥加オハセジ。
希有事承ヌルモノカナト申ケレバ、俊頼アシゲニ思テコソ侍
シカトゾ語侍シ。

今案ニ、俊頼ガ歌ハ、キハメタルクチギ、ニテ、ワリナクオ
モシロクハヨミタレド、サビケダカク幽玄ナルスガタハミエ
ネバ、業平歌ヲモ我ネガフサマナラネバ、サヤウニ思トリテ
侍ケルニヤ。基俊ハ、俊頼ハ歌ヨムヤウモシラヌモノトナム
常ニ申侍ケル。ソレモヒタオモムキナリ。和歌ノタケナシト
思ケルニヤ。顯季卿ハ、俊頼ハ読口ハ無左右トコソユルシ侍
ケレ。ウタヨミトイフハ、人ノクチヨリ歌ヲヨミイヅルヤイ
フ也。俊頼ハ歌ノエボウシヲシタルナリトコソ感ジハベリケ
レ。又俊頼自云、我ハ歌ヨミニハアラズ。歌ツクリナリ。カ
クイフコ、ロハ風情ハツギニテ、エモイハヌ詞ドモヲトリア
ツメテキリクムナリトゾ申ケル。サモイハレテ侍事歟。此条
ヨシナシ事ニ侍ド、歌ノスガタニツキテ、其モコ、ロエラル
ル事ニテ侍バ、事ノツイデニ注申也。（下略）

冒頭「コレハコノトコロニテ、コゾアヒシヒトノコ、ニモナクテ、
コヨヒエアハヌコトヲオモヒテ、月モアラヌ月ニテアルカ、又春モ
ムカシノハルニハアラヌカ、ワガミヒトツバカリハモトノミニテア

レド、アヒシヒトモナキハトメルナリ」と一首解釈を提示している。注釈の基本はこれで尽くしている。しかし、続けて、顕季と俊頼との業平歌の評価をめぐる応酬についての顕輔の有名な語りを披露している。さらに顕昭は「今案」として自分の和歌観を述べる。最後に「此条ヨシナシ事ニ侍ド、歌ノスガタニツキテ、其モコ、ロエラルル事ニテ侍バ、事ノツイデニ注申也」と、これも弁明らしきことばを付け加えている。

一首解釈には直接の関係がない逸話であるが、『顕昭古今集注』には、このような一首解釈とは関係がない逸話がいくつも見られる。特に俊頼や良暹、それに絡む六条家の祖顕季・顕輔、また勝命らの口伝や逸話が多い。前に引用した一四七番歌注にも、良暹が誤った語義解釈に基づく歌を詠み、懷円に「嘲哂」された逸話書き記されている。そこには、そのような逸話を要求した歓迎した場の存在が想定され、それが仁和寺であれば、仁和寺という場の性格の一端を明かしていることとなる。

それはともかく、この逸話の部分は「ヨシナシ事」を「事ノツイデニ注申」した付加的部分である。顕昭の注釈が、一首解釈を基本としながらも、難義語注や逸話の披露など、自在に派生、展開してゆく特質を持っているといえよう。むしろ、派生的、突出的展開部分こそ顕昭の筆致は生き生きしている。

冒頭に確認した顕昭注釈執筆の基本方針のふたつめは、六条家歌学の継承であった。それは、難義語注釈を派生的に縦横に展開させるという形で実現している。『顕昭古今集注』が、『教長古今集註』よりもはるかに価値あるものになっているのは、注釈の基本である一首解釈より、そこから派生、突出した、難義語の注釈という自家、自身の得意分野であった。

歌学のうちの注釈分野は、主として難義語の注釈から始まったが、一方で古今集歌の注釈が教長の注釈より本格的に開始された。そのふたつの流れが、顕昭注釈において、冒頭に確認したふたつの執筆方針を立てることによって、微妙な形で接合したといえる。それが、『顕昭古今集注』のひとつの達成点である。

七 古今集注釈史の意義

注釈とは何のためにあるのか、何を目的として書かれていたかという議論がある。その中で有力なのは、和歌実作のための注釈という説で、『俊頼龍腦』以来の『和歌童蒙抄』『奥義抄』さらに『袖中抄』と続く難義語の注釈史を見るとその結論は是認すべきであろう。

しかし、本稿では、古今集注釈史に限ってみると、必ずしもそうはいえないのではないかとこのことを論じようとしたものである。

古今集注釈史は、『古今集』崇徳院御本の再出現より本格的に始まったというのが、拙論である。守覚法親王が崇徳院御本を所持するという教長に古今集注釈を受けるという意図について、次のよう記録されている。

同二年正月十三日、於同庵室、重受人道相公了、去安元二年四月、雖伝受、古歌之為体、輒難練習、仍度々遇此禪門、伝其秘、年来蒙故院御諷諫、異余人説而已。(下略)

『源承和歌口伝』所引教長訓点本奥書「古歌之為体」の「秘」を「伝受」という意図で古今集注釈の講義を受けたのである。さらに重ねて、守覚は、顕昭に対し、冒頭に確認したように、「件本」を「賜」って、「披閱」を「加」え

「邪正」を「糺」すよう古今集注釈を依頼した。このように、ここまでの古今集注釈史は、崇徳院御本を畏怖した守覚法親王に領導されてきた。

守覚が『古今集』注釈をふたりに命じた問題意識は、同集歌の「古歌之為体」を得て、「邪正」を明らかにすることである。特に「邪」と「正」とを分明にするよう求めたのは、『古今集』の歌々の「正」しい解釈を求めたものとして注目される。「正」しい解釈を求める意味は、正説を求めるようになったという時代風潮もあるが、拙論の文脈からあえて穿つていえば、そこには崇徳院の鎮魂が意識されているということになる。崇徳院御本に基づき「邪正」を糾明することが、歌道を愛し学識もある崇徳院を慰撫することにつながるのではないか。両者の注釈とも、「ノヤウニ（ニヨセテ）トヨメリ」と作意を示した一首解釈を基本としており、その意味で守覚の問題意識に応じているといえよう。『古今集』から難解な語句を抽出してそれらに限定して注解を加えるというものではない。古今集注釈史は読解のための注釈として成立した（もちろん、序注は別。古今集歌注釈史に限定しての謂いである）。

院政期歌学は、恣意的、無限定的であるといわれている¹⁰。多くの難義語注釈を見れば、それも首肯できる。しかし、古今集注釈は、『古今集』の歌から出発して正しい解釈を求めて収斂する。無限に拡散してはいかない。結局、『古今集』の歌々をどう読めばよいのかという、素朴な疑問から出発しているといえる。わからないから「邪正」を「糺」す、正しい解釈を求める。注釈が行われる純粹な動機が、ここでも認められることを強調しておきたい。

古今集注釈史は、その意味では、直接的には、和歌表現史には寄与していない。ただし、難義語注釈も、実作のための注釈であった

とはいえ、和歌表現の進展にどれほど関与できていたろうか。実際には、動機や目的とは裏腹に、表現史への寄与は限定的であるといわざるをえないのではないか。

古今集注釈史が表現史に意味を持ち得たとすれば、ともかくも、『古今集』歌一首一首の解釈を、かなりの異説を残しながらも、確定することができたことである。正しい解釈を求めて注釈を積み重ね、『古今集』の歌といえは各歌人共通の理解がある程度は共有できたのである。証本の確立・本文の確定と相俟って、『古今集』歌それぞれの歌の表現世界が確立したといえる。藤原俊成らの『古今集』規範主義も、『古今集』歌の正しい解釈を共有してこそはじめて成立するのではないか。

さらに限定して和歌表現の方法論に関していえば、『古今集』歌についての各歌人の理解の共有と『古今集』歌の表現世界の確立は、新古今時代へ向けて本歌取の方法を用意したといえる。本歌取は、詠者の表現以前に、古歌の世界の確立と各歌人共通の理解が絶対的に不可欠である。「本歌取り侍るやうは、（中略）その歌を取れるよと聞ゆるやうによみなすべきにて候」（『毎月抄』）とあるように、享受者の理解を前提として初めて成り立つ。いまだちに論証する用意はなく次の課題としたいが、本歌取の方法は、古今集注釈史の成果をふまえて成り立ったものであるはずである。

（1）拙稿「『顕昭古今集注』注釈学の形成（上）——教長注釈披閲と仁和寺文化圈——」（『文教大学女子短期大学部研究紀要』45号、平14・1）

（2）片桐洋一「中世古今集注釈書解題」第六卷（昭62・6）

（3）西村洋子「藤原教長論——『古今和歌集註』の検証を中心

に——」(『仏教大学大学院紀要』24号、平8・3)

(4) 西村加代子「顕昭と清輔——学説の継承と対立をめぐって——」(『国語と国文学』昭52・7、『平安後期歌学の研究』平9・9所収)

(5) 拙稿「『教長古今集註』注釈の方法」(『文芸論叢』36号、平12・3)

(6) 山田洋嗣「中古歌論・歌学の展開」(『王朝の和歌』和歌文学講座5、平5・12)では、顕昭の著に「今案」が多く記されている点に関して、「これは実は説、特に家の説、の継承という性格を持つ当時の歌学の枠におさまらない部分であり、博覧強記と強靱な批判精神による学的厳密さとともに顕昭歌学の特徴をなしている。歌学の枠を顕昭自身がしばしば突き抜けてしまっている」と述べている。

(7) 山田洋嗣「難義は難義にておきたればこそあれ」の意味——平安後期注釈の問題として——」(『福岡大学日本語日本文学』2号、平4・12)に、「われわれは読解のための注釈という近代的な視点から今少し自由になるべきであろう」とある。本稿も、それに基本的には賛同するものであるが、一面においての再検討を試みたものである。

(8) 拙稿「古今集注釈史の始発——崇徳院御本をめぐって——」(『文芸研究』144集、平10・3)

(9) 佐藤明浩「『かはやしろ』の論争をめぐって」(『名城大学人文紀要』46集、平5・12)による。

(10) 小川豊生「『本文』と『今案』——院政期歌学のディスコース——」(『古典研究』1号、平4・12)などに代表的される論調。

本文は、『教長古今集註』は京都大学付属図書館蔵本(四一二三/貴/コ1)の紙焼写真本に、『顕昭古今集註』は『日本歌学大系別巻四』所収本に拠った。他は、通行の活字本に拠る。